

金融英語の語源（2）：利子は時間、起業には血気、頭が資本

Watabe, Ryo / 渡部, 亮

(出版者 / Publisher)

野村アセットマネジメント研究開発センター

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

ファンドマネジメント / ファンドマネジメント

(開始ページ / Start Page)

84

(終了ページ / End Page)

87

(発行年 / Year)

2008-06-25

金融英語の語源 (2)

一利子は時間、起業には血気、頭が資本

法政大学教授 渡部 亮

今回は、ドルが歩んだ数奇な歴史を、その語源に即して述べた。今回は、米国の貨幣制度や資本市場の確立に貢献した、ベンジャミン・フランクリンの言動を手掛かりに、利子、投資、資本などの語源を探ってみる(注1)。

ベンジャミン・フランクリンの偉業

銀行発行紙幣(銀行券)の歴史は古いが、近代において最初に政府が紙幣を発行したのは米国であった。中国でも、元や明の時代に政府紙幣が発行されたが、それは金銀正貨を民間から没収するのが目的だったから長続きせず、元や明の没落ととも途絶えてしまった。

米国の紙幣制度導入に尽力したのは、ベンジャミン・フランクリンであった。その功績を称え100ドル紙幣には彼の肖像が印刷されている。大統領未経験者でドル紙幣に肖像が使われているのは、フランクリンだけである。彼は、2年間の学校教育だけで、印刷見習工からたたき上げた立志伝中の人物だが、避雷針や燃料効率の良いストーブ、遠近両用メガネ、ロッキングチェアなどを発明した。そのほかにも風を用いた実験で、雷には電極のプラス(正)とマイナス(負)があることも発見した。さらに郵便、消防、図書館、病院などの諸施設やペンシルバニア学院(ペンシルバニア大学)の設立にも貢献した。

現在では市場経済システムの支柱となっている、次のようないくつかの格言も、フランクリンが言っ

たとされている。「時は金なり(貨幣の時間価値)」、「早寝早起きは健康と富裕と賢明のもと(勤勉の精神)」、「老妻、老犬、手元現金は忠実な友(流動性の重視)」、「貿易によって潰れた国はない(自由貿易の重要性)」、「この不確実な世の中において死と税金以外には確かなものはない(不確実性と納税義務)」、「自らを助ける者を神は救い賜う(自助の精神)」等々といった具合である。

フランクリンはレッセフェール(自由放任)という単語の使用にも関係している。レッセフェール(laisser-faire)は、18世紀にフランスでフランソワ・ケネーが提唱した重農主義(physiocracy)に由来し、フランス革命にも影響を与えた概念である。英語でlet people doというべきところが、フランス革命の威力のためか、そのままの形で英語に入ってきた。重商主義(mercantilism)が、政府による民間経済介入や保護貿易など人為的秩序を重視したのに対して、重農主義は人為的秩序を排し、自然秩序を重んじる自由主義的な考え方であった。もともとスミスやケネーの著作には、レッセフェールという言葉は出てこない。ケインズの評論『自由放任の終焉』によれば、英国においてこの言葉が人口に膾炙するようになったのは、ベンジャミン・フランクリンやジェレミー・ベンサム(ベンサム)の著作を通じてであった。

レッセフェールは、今日では市場原理主義の看板のようにみなされているが、もともとはフランス

のないしはラテン的な考え方であった。重農主義と重商主義は、その後現在に至るまで交替を繰り返し、20世紀の新重商主義に続く現在は、重農主義の時代ともいえる。重農主義 (physiocracy) の physio は、ギリシャ語で自然を意味する physis を語源とする。「農業」の意味はなかったのだが、日本の経済学者が「重農」と意識したのであった。

貨幣の時間価値

フランクリンが示唆した貨幣の時間価値という概念は、現代の利子論でも踏襲されている。Interest は、inter (間) と esse ないし est (存在する、英語の to be に相当) の合成語で「間に存在する」、「間に入る」といった意味である。間に入るわけだから「関与」や「興味」という意味にもなる。

このように利子とは、異時点間に存在する貨幣価値の差額であり、時間価値を表す。『資本と利子』などの著書で知られるオーストリアの経済学者オイゲン・フォン・バウム＝バヴェルクは、時間という要素によって利子を説明しようとした。彼は、現在手に入る財のほうが、将来手に入る同じ財よりも過大に評価されることをあげ、それが利子の発生理由であると論じた。つまり将来の欲望充足よりも現在の欲望充足のほうが、我慢しなくて済む分だけ高く評価される。現在の欲望を充足できるからこそ、人々は現金を手放したがるのである。現金を手放して貸し出したり預金したりするためには、失われた時間にたいする代償 (我慢料) が必要であり、それが利子なのである。ケインズも『雇用、利子、貨幣の一般理論』の中で、利子とは「流動性を手放すことに対する報酬」であるととした。

一方、投資資金を借り入れる生産者のほうからみると、大仕掛けの機械を購入し投資の懐妊期間を長期化することによって、収穫 (生産量) を高めるこ

とができる。つまり利子を払ってでも、大仕掛けの機械を購入したほうが得である。手持ちの小道具 (例えば釣り竿) を使って日銭を稼ぐより、時間をかけて大きな機械 (トラール網) を据え付けたほうが収穫量は大きい。これを迂回生産という。迂回生産によって収穫を増大させることができるから、生産者は利子を払ってでも資金を借り入れようとする。こうしてバヴェルクは、資金需給の両面から利子の存在理由を説明した。

ところで、interest は14世紀にチョーサーが著した『カンタベリー物語』の中で、興味や関心といった意味で使われ始め、16世紀に利子の意味が加わった。それ以前の時代には、利子は usury といわれていた。これはラテン語の *usus* (英語の use) を語源としており、使用料といった意味だった。しかし、1%の利子でも長い間には大きな負担を生むから、利子をめぐって幾多の争いが起きた。そのためイスラム教やユダヤ教だけでなくキリスト教も、時間は神の所有物であるという理由で、付利を禁じた。しかし後になって、高利は禁止続けたものの、常識の範囲内の利子は容認されるようになった。いまでは usury は高利貸を意味する単語になっている。

借入れではなく自己資本で投資を行う場合には、通常の利子に加えて大きなリスクプレミアムが付く。プレミアム (premium) は、ラテン語の *prae* (before) と *emere* (buy ないし take) が合成されて出来た単語であり、「他者に先んじる」ないし「困難に挑む」というのが原義であった。他者に先んじてリスクを取るときには、十分な割増金を期待するわけで、17世紀末になり、プレミアムに割増金という意味が加わった。

invest は衣装の中に包み込む

さて国内総生産 (GDP) を支出面からみると、消

費と投資に大別されるが、長期的な経済成長にとって重要なのは消費よりも投資である。投資は経済成長の源泉だが、消費は「消耗する」や「破壊する」を意味するラテン語 *consumer* (英語の *consume*) が語源であり、あまり良い意味ではない。*Consumption* には「肺結核」という意味さえある。肺結核は体力を消耗するからである。

「投資する」を意味する *invest* は、ラテン語の *investire* を語源とする。チョッキのことをヴェスト (*vest*) というように、ラテン語の *vestire* も、「服」や「着る」を意味する。*invest* とは服の中 (*in*) に入れる、つまり「懐に入れる」ということになり、それが転じて「利益を期待して資金を委託する」という意味となった。*invest* が「投資する」という意味で使用されるようになったのは、東インド会社が設立された1600年以降のことである。現代の投資銀行 (*investment bank*) は、当世版東インド会社ということになるであろう。

消費や貯蓄の源泉は所得であり、個人や家計の場合、所得の中心は勤労報酬である。報酬 (*compensation*) には、金銭的報酬と非金銭的報酬とがある。さらに金銭的報酬は、サラリー (*salary*) とボーナス (*bonus*) に分かれる。このうち *salary* は月給や週給など一定率の固定給であり、*bonus* は臨時手当である。*Salary* は、ラテン語で「給料」を意味する *salārium* (英語の *salt money*) が語源である。*Sāl* は塩を意味するが、これはローマ時代に塩が貴重品であり、兵士の給料 (日当) が塩で支払われたためである。*Bonus* は、ラテン語で「うれしい」とか「素晴らしい」を意味する *bonus* (フランス語の *bon*) に由来する。固定給以外の報酬だから、たくさん貰えればうれしいことは間違いない。なお非金銭的報酬には、会社側負担の社会保険料などの福利厚生費 (*fringe benefit*) や研修・社費留学

などが含まれる。

capital は頭脳資本

投資には資本 (*capital*) が必要である。*capital* は「頭」を意味するラテン語の *caput* を語源とする。その昔は、牛などの家畜が主な動力源であり、家畜を何頭持っているかによって資本力が決まった。英語の *capital* には、「首都」や「頭文字」の意味もあるし、類似語の *captain* は「首領」ないし「主将」を意味する。いずれも頭や首に関係する。また、一人当たり GDP というときの「一人当たり」は *per capita* だが、この *capita* は *caput* の複数形である。さらに死刑のことを *capital punishment* というが、これなども「首罰」と訳せばわかりやすいだろう。バブル崩壊などで資本市場 (*capital market*) が大混乱に陥ると、米英のメディアは、*capital punishment* (資本市場に極刑) といった見出しを掲載する。*Chattel* (動産) や *cattle* (家畜) も、*capital* と同属の *capitāle* (資産) というラテン語を語源とする。高度知識社会における資本はまさに人の頭脳だから、首から上の部分 (*caput*) が資本というのも納得できる。わけても金融業は、人的資本や頭脳資本を元手にする。資金という意味での資本は希少性を失ったが、頭脳や知恵には希少価値がある。

ところで創世記に、神は土からアダムという人間 (*human*) を作ったと旧約聖書には記されている。*human* の語源の *humus* は「土」や「大地」を意味するラテン語である。同じ人でも *person* (人物) の語源は、*persōnam* (演技者の仮面) である。現代の企業経営における人的資本は、土に由来する *human* (人間) よりも、仮面に由来する *person* (人物) のほうが実態に近い。スキルという知的仮面をまとった個人が、人的資本としての価値を誇示し、グローバルな市場で頭脳裁定 (*brain arbitrage*) や

知能裁定 (intellectual arbitrage) を起こす。それが現代の金融経済である。

entrepreneur はニッチを探す

資本を使って投資を実行するのは企業家である。ジェセフ・シュンペーターは「企業家精神」、「新機軸」、「創造的破壊」、「銀行信用」といった諸要因を、経済発展の原動力として強調した経済学者である。このうち新機軸 (innovation) は革新とも訳され、ラテン語の *innovāre* (英語の *renew* に相当) を語源とする。彼の出世作『経済発展の理論』の中では、新結合 (new combinations) という言葉が使われていたが、後年の著作になってから、新機軸 (innovation) に変わった。

シュンペーターの新機軸は、新製品の生産、新生産方法の導入、新販路の開拓、新資源ないし新供給源の発見、新組織の実現を含む広い概念であった。新組織の実現とは、現代風にいえば企業統合や新会社設立を意味する。単に新製品開発だけでなく、新組織の実現をイノベーションに含めていたことは興味深い。

アントルプレナー (entrepreneur) が新企業 (enterprise) を興し、その新企業が旧製品の生産に割り当てられていた資本を奪い取る形で、新設備を用いてイノベーションを実行する。entrepreneur の元来の意味は「興行主」であり、enterprise と同じ語源の単語である。ともにフランス語の *entreprendre* から来ている。この *entreprendre* には「始める」という意味があるが、これを接頭語と語幹に分解すると、「間」や「際」を意味する *entre* (英語の *inter*) と、「手に取る」ないし「つかむ」を意味する *prendre* (英語の *take*) が組み合わさっている。だからアントルプレナーには「前人未踏の領域を切り開く」、「間隙を突く」あるいは「隙間

(ニッチ) をつかむ」といったニュアンスがある。なお『経済発展の理論』初版 (1911年) はドイツ語で書かれたので、フランス語のアントルプレナーが *unternehmer* (英語の *undertaker* に相当) というドイツ語になっていた。

シュンペーターは、アントルプレナーの資質として、主体性 (initiative)、権威 (authority)、予見力 (foresight) といった要素を強調した。アントルプレナーは、データが存在しない未開の領域に挑戦するわけだから、その事業活動には賭けの要素が強く、的確な直観力や血気が必要とされる。既成観念を打ち破る自由な発想や、抵抗勢力に対抗する気概も必須要件である。新組織の実現では、特にリーダーシップが不可欠である。問題の所在やビジネス機会の在り処 (ありか) は、はじめから多くの人々にも明らかで、アントルプレナーの真骨頂は実行力にある。

シュンペーターは経営者の血気を奨励したが、コーポレートガバナンス (corporate governance) という概念は出てこない。後の時代になって、経営者の信認義務違反が目につくようになり、今日的な意味でのガバナンス問題が脚光を浴びた。この *govern* は「船の舵をとる」という意味のギリシャ語をラテン語が借用し、その後フランス語経由で英語に入り、「統治する」とか「管理する」といったニュアンスを帯びるようになった。

以上述べたように、市場経済システムや会社制度は、ラテン語からの借用概念によって構築されている。(以下は次号に続く)

(注1) 本論のフランクリンに関する記述は、主として下記の文献を参照した。

— Weatherford, J. M., [1997] *The History of Money* (Crown Publishers Inc.)